

「評論・社会科学」創刊にあたって

同志社大学文学部の機関誌「人文学」第一集(マ)が刊行されたのは、敗戦後まだ日も浅い一九四八年十二月であった。英文、文化、社会の三学科をあつめても、教員総数十八名という小集団であったから、文学部全体で一つの機関誌ということも当然のなりゆきであった。教室に暖房がないのはもちろん、窓ガラスが破れても、せいぜい板ぎれをはりつけて我慢するほかなかったし、なにかの機会に一緒にたべた仕出し弁当に、焼きざかながはいっているといって、若かった同僚が感激したような時代である。

この第一集(マ)には三学科から、それぞれ一編ずつの論文が寄せられたが、社会学科からは故竹中勝男教授が「福祉の社会理論」を寄稿しておられる。

しかし、翌一九四九年には学制改革にともなう教員数の増加もあり、各学科がそれぞれ特集の名で交代に「人文学」を発行するようになった。社会学科特集は五一年一月の第四輯(マ)から始まって、最近では一九九号、一一四号などであり、そして一一七号が最後となった。

右のような発行方法にいろいろ不合理な点の生まれることは、早くから指摘されていたのである。ことに、教員数が一〇〇を越えるような学部となれば、各学科ごとに独立の機関誌をもって研究成果を発表すべきだという声が大きくなっていった。しかし、この当然自明と思われる改革にも、意外なほど長い時間が

「評論・社会科学」創刊にあたって

かかり、今ようやく、「評論・社会科学」が発刊の運びにいたつたのである。同志社大学文学部社会科学の機関誌として発行されるものである。

しかし誌名がかわつたからといって、それだけで内容の革新を保証するものではない。これを機会に、その名にふさわしい内容を盛りこもうとする意欲が期待されるゆえんである。たとえば、「社会科学」である以上、特定の価値感情にとらわれて、客観性を見失つてはならないであらう。幸いに、同志社大学立学の精神は、自由と国際主義をうたつてゐる。創造的活動の可能性という自由の持つことも積極的な意味をいかし、国際主義を普遍妥当性の意味に解して活発な研究活動がなされることが期待されるのである。また、同志社がキリスト教主義に立脚する大学であることは周知のとおりであるが、そのキリスト教は一方で、人間の営みが窮極においてすべて不完全であることを教えるとともに、おなじ人間が他方では、自己と社会とに対して責任を負わねばならないことを教えるのである。人間はついに完済することがあり得ないことを知りながらも、つぎつぎに生ずる債務をどこまでも払い続けざるを得ない存在である。人類の歴史、文化の歴史は、永遠の手直しの歴史にほかならない。

この雑誌に課された任務も、つぎつぎに新しい手直しのすべを探究し続けることにほかならないであらう。

一九七一年二月

伊藤規矩治